



2006年10月発行

## 十字架の愛

「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが、しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」

(ローマの信徒への手紙5章6～8節)

キリストが私たちのために死んでくださったのは、私たちが正しかったからでも、善人だったからでもありませんでした。むしろその反対で、弱く、不信心で、罪人であったにもかかわらず、そんな私たちの身代わりとなって、死んでくださったのです。

身代わりになって死ぬ、と言うようなことは、そのこと自体、そう簡単に出来ることではありません。正しい人のためには、その身代わりになって死ぬ必要など、先ず起こりようがありません。がそれ以上に、ただ正しいと言うだけでは、この人のために死んでも命は惜しくないとは、恐らく誰も思わないでしょう。しかし、善い人、善人ならば、善を施してくれたこの人のために、死んでも構わない、と思う人がいるかも知れません。現にペトロは、十字架を目前にした主イエスに対して、「主よ、御一緒なら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」(ルカ22:33)、と言うことが出来ました。恩を受けた先生のためなら、死んでもよい、と彼は本気で思ったのです。この時のペトロの本気さを、私たちは疑う必要はありません。しかし、そうは思っても、実際にはそう出来なかったし、むしろ彼は、その逆のことをやってしまったのです。人間の愛は弱いのです。「わたしたちがまだ弱かったころ」、と言われる場合の私たちの「弱さ」とは、ペトロに見られるような、愛することの弱さ、正しいことを遣り通すことの出来ない弱さを言うのです。それは、ど

んな立派なことを言っても、結局は神の期待を裏切らざるを得ない、不信心以外の何ものでもなく、聖書は、そんな人間の本质を鋭く見抜いて、「罪人」と言うのです。

ところが、キリストは、弱く、不信心で、罪人でしかなかった私たちのために、その命を捧げてくださったのです。人間の間では、自分に善意を示し、愛を注いでくれた者に対してすら、裏切りをもって報いる、と言うことが起こります。ましてや、自分に悪意を抱き、憎んだり、呪ったりする者に対しては、敵意を抱きこそすれ、愛することなど、とても出来ません。ところが、キリストがお示しくださった愛は、敵をも愛する愛だったので、ですからパウロは、この点を明確にするために、更に10節では、「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいた」、と言いました。

恐らく、此れを語っていた時、パウロの心には、かつての自分の姿が浮かんでいたのでしょう。復活のキリストに出会い、回心するまでのパウロは、正に、キリストの敵でした。彼は、キリストを憎み、教会を撲滅し、キリスト者を地上から抹殺することに、使命を感じ、情熱を燃やしていたのです。彼は、わざわざ大祭司の許可を得て、実際に、「この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するため」(使徒9:2)、ダマスコまで出掛けて行ったのです。ところが思い掛けず、その途中で復活のキリストに出会い、その御声を聞くのです。その御声とは、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」(同9:4)、と言う御声でした。パウロが迫害していたのは、単にキリスト者ではなく、実は、キリストその方だったので、しかし、そのキリストは、敵であるパウロのためにも、既に、十字架にかかり死んでくださったのです。

敵をも愛する十字架の愛、「神の愛」とは、つまり此れを指すのです。

牧師 三輪恭嗣

(2006年8月27日の礼拝説教より)